

2026年度 国際日本文化研究センター共同研究会

<共同研究の目的>

国際日本文化研究センターが最も力を入れているのは、共同研究方式の日本文化研究です。日本文化を研究するためには、関係する個別専門分野ごとの成果が着実に積み重ねられなければなりません。と同時に、専門分野の枠組を越えて、研究者が相互に知見を高めあう場が必要になります。こうした共同研究の場は、総体として日本文化理解の促進に大きな役割を果たすものと考えます。このような観点から学際的な共同研究にウエイトを置いています。

また、日文研の共同研究では、日本と異なる知的伝統にたつ海外の研究者との交流をも重視します。異文化からの視点は研究に新しい展望と成果を与え、また研究のあり方に、よい意味での相対比をもたらします。さらに、国際化の時代を迎えた今日、日本文化研究もまた国際化をはかることで、時代の要請に応えることができるでしょう。

もちろん、日文研の共同研究は、単なる研究成果の交換にとどまるものではありません。専門分野及び知的伝統を異にする研究者たちが研究過程を共有しあうことによって生みだされる創造性、これこそが、日文研の共同研究がめざすところの眼目なのです。

(※奨学生はオブザーバーでの参加となります)

「身心（身体知）」と「自然（環境系）」の相関

—東アジアから考える／発信するオルターナティブ

<研究概要>

過去3本の共同研究会を引き継いだ上で、①東アジアの伝統的な自然観、②自然環境史、生態学、災害史などを踏まえた新たなグローバル・ヒストリーの構築、③アジアの伝統医学思想や医療史、⑤東アジアの伝統的な身体観、ジェンダー観、⑥伝統的な武道・武芸、⑦文学や芸術に表象された身体表現など、様々な主題を扱いたい。また、副題をも念頭に置いて、現代的な課題を視野に入れて、人文・社会科学の幅広く、多様な分野の専門家の知見を仰ぎながら、比較の視点も踏まえて、より普遍的な考察を重ねて参りたい。取り分け、今回は、ゲノム生物学、人類進化学や集団遺伝学など、理系・自然科学系の研究者の協力も仰いで、一面では、生態学や自然環境史、自然史／自然誌なども含んだ、文理融合的な研究の実を挙げることも目標としている。

総じて、学際的・分野横断的な方向性の上で、新たな価値観を模索・構想しつつ、異種混合的な共同研究会を目指すものである。

<研究代表者>

伊東 貴之 国際日本文化研究センター教授

<本年度研究会開催予定>

5回

植民地帝国日本における生・病・死

<研究概要>

本共同研究は、日本統治期の台湾・朝鮮・「満洲」などを中心に、「帝国と医療」の関係を多角的に探る試みである。「生・病・死」の問題に焦点を当てたいと考えたのは、この領域が現在、帝国や国際的連環をもっとも強く意識している分野だと考えるからである。同時に、この領域は人文学諸分野の成果を取りいれたいわゆる「新しい医学」の登場によって学際的研究へと展開しつつあり、それを広く植民地研究と接合させることも本研究の目論見の根底にはある。他方で、これまでの帝国史研究は、地域ごとに分けられたり、日本中心に偏ったりする傾向があったが、本研究ではそれを乗り越え、複数の地域と日本「内地」を横断的に捉える視点を旨とする。医学だけでなく、文化人類学や文学、ジェンダー論などの知見も取り入れながら、医療や病の歴史を広く社会の問題として考えることで、帝国日本における「生・病・死」の全体像を明らかにしたい。

<研究代表者>

松田 利彦 国際日本文化研究センター教授

<本年度研究会開催予定>

4回

「知」を編むということ―集輯・編訳・表象にまつわる共創的探究

<研究概要>

「知」はいかにして編まれ、変容してきたのだろうか。その結果、いかなる問題が生じどのような可能性が拓かれてきたのか。本共同研究は、国際的な視野からみた際に浮かび上がる「知」の編纂の実像と可能性について探究する。「知」を集め、選び、訳し、表すという営みは、時代・文化・事物により多様な様相や展開を遂げてきた。本共同研究会では、歴史学、文学、芸術、思想など多岐にわたる分野の研究者の専門知・経験知から、「知」の編纂を多角的に考察する。日本研究者に限らず、多分野の専門知を結集し比較的視点を組み込むことで、「編む」という営みの歴史的・文化的・言語的特性を明らかにするとともに、その力学や政治学、問題系を学際的・総合的に検討する。さらに現在（いま）、いかなる「知」が求められているのかを問うことで、未来に向けた「知」の集輯・編訳・表象・伝達の可能性についても追究したい。

<研究代表者>

片岡 真伊 国際日本文化研究センター准教授

<本年度研究会開催予定>

4回

国家形成のなかの知－比較国制史からの日本論－

<研究概要>

本研究は、国制史の立場から政治単位としての日本の特異性と普遍性を探求するものである。国制史とは国家の成り立ちとその制度的構成や変容を対象とする。だがそもそも、国家とはどのような政治的制度的実態なのか。それは時代ごとに振幅があり、地域ごとに差異がある。このテーマを討究するために、共同研究を実施して、知という視角からアプローチする。国家形成は知識形成を伴う。国家の制度や理念を立ち上げ、運営し、継承していくために、国制はそれに見合った知を必要とする。そのような問題関心から、古今東西の国制にはめこまれた知を抽出し、その比較のなかで日本国制史を考察する。

<研究代表者>

瀧井 一博 国際日本文化研究センター教授

<本年度研究会開催予定>

3回

異文化媒介者たちの比較史

<研究概要>

本研究の目的は、異文化圏から到来し文化移入を媒介した人々や集団に焦点を当て、その活動を比較検討することで、列島社会の文化的特徴を明らかにすることである。いかなる文化的営為も歴史的条件と無縁に行なわれることがない以上、異文化媒介者の活動はそれ自体が地域・時代的背景の反映になる。本研究では彼らの活動の背景や彼らを介した異文化移入の様相を見ることで、その時代・地域における国際環境や社会環境を明らかにすることも目指したい。

<研究代表者>

榎本 渉 国際日本文化研究センター教授

<本年度研究会開催予定>

4回

近代日本における「文人文化」の変容

<研究概要>

本共同研究は、「文人」の概念を広く「教養がある人、文雅を愛する人」として捉え、「文人文化」の近世から近代への連続性に注目しつつ、その近代における変容の具体像を文学史、美術史、書道史、煎茶文化史、建築史など、複数分野から明らかにすることを目的とする。江戸時代の中期以降、詩文書画を愛好する「文人」層の定着とほぼ同時期に中国から「文人画」が伝来し、独自の発展を経て幕末から明治期にかけて日本全国で盛んになった。文人文化は漢詩や文人画の作品世界に留まらず、漢詩文、書画、煎茶などの趣味的会合と文人的趣向が反映される建築、庭園空間にまで広がりを見せた。同時に、文人画が持つ趣味性は幅広い社会層に支持され、江戸と上方から地方にまで浸透していき、作品の優劣判断と別の次元で、「詩・書・画」を中心とした総合的芸術活動として日本文化の重要な一翼を担っていた。ところが、明治以降、西洋文化の流入により、この多様な内容を持つ文人文化は社会の表舞台から急速に姿が消えたように見えた。これはもちろん歴史記述が新しい事象に傾いた結果であり、文人文化の消失を意味するものではない。筆や墨の表現は新たな作品世界を創出するために変容し、漢詩人や書画愛好者の雅集は政治、外交、文化交流の場として機能しはじめた。「文人文化」を構成する諸要素は新たな時代要請のなかで変容しつつ、近代以降も存続していた。本共同研究では、近世から近代への連続性を踏まえたうえで、これら「文人文化」の近代における変容の具体像について、東アジアとのつながりを視野に入れて各分野から総合的に検証していく。

<研究代表者>

戦 暁梅 国際日本文化研究センター教授

<本年度研究会開催予定>

3回

近代東アジア文化史の再構築Ⅱ—20世紀の百年間を中心に

<研究概要>

周知のとおり、日、中、韓、越の東アジア四ヶ国の文化は、古代、近代を問わず、つねに互いに影響しながら緊密に連動している。古代では、漢字や漢文、また儒教や仏教などがその基盤を成し、そして近代では、いわゆる「西力東漸」という時代の流れの中で、東アジア四ヶ国はさらに相互に経験と教訓を参照し、互いに支え合う形でそれぞれの文化的転換を目指して、一つの全体のもとで漸次に西洋の文化、文明を受容してきた。そのため、19世紀以降の東アジアの文化の生成と発展からすれば、それを各国の一国内史に切り分けては、けっしてその間の真の歴史的過程を再現することができない。

本共同研究会では、近代日中の文化交渉を中心に、その相互に影響し、交錯するさまざまな歴史的事例の考察を通して、従来の一国史的な歴史叙述の脱構築を図るべく、既成の歴史記述とは異なる視点や方法を提示し、当該地域全体の文化史をあらためて構築してみたい。

<研究代表者>

劉 建輝 国際日本文化研究センター教授

<本年度研究会開催予定>

4回